

選 抜 方 式

1 一般入試方式

1次、2次、調査書及び健康診断などの判定資料を総合して、合否が判定される方式である。57年度は第2次募集に関する研究がやや多く関心の強さがうかがわれた。

(1) 2段階選抜

福井医科大学では、これを55年度に実施し56・57年度は実施しなかったが、この両時期における標準偏差、1次総点・2次総点・総計得点の相関係数を比較したところ、各年度とも2次総点の方が相関が高い結果がみられた。

(2) 総合判定方式

熊本芳朗（電気通信大学）は、1次・2次試験の成績の和による選抜方式を統計学的分析に基づいて考察し、総合判定方式について、①独創力・応用力等の評価を含む多様な出題方法、②1次・2次両試験のいずれか一方の高得点者を他方の成績にかかわらず合格させる枠別選抜、を提言している。

(3) 第2次募集

57年度に定員を留保して第2次募集を実施した国立大学の学部数は20(5.8%)、欠員があるため第2次募集をした学部数は31(8.9%)であった（国公立大学ガイドブック 昭和57年度

版）。これらのうち、関係の研究は10大学にみられたが、その主な内容は次のとおりである。①21大学25学部の実施校の実施理由を調査したところ、成績のよい学生の入学(15校)、受験機会を2度与える(7校)との結果であった（鳥取大学）。小樽商科大学・富山大学も全国的に実施状況等を調査した。②1年次における退学率は1次募集入学者を大きく上回り6%であった（福島大学経済学部昼間主コース）。③1次試験成績は1次募集受験者より高い（前記校、秋田大学鉱山学部）。④学内成績の追跡調査の結果は、1次募集入学者群との間の格差縮小（鳥取大学）、1年次成績では両群に注目すべき差はない（福島大学）、成績の悪い者が1次募集入学者群より高率になった、などであった。

2 推薦入学方式

57年度に推薦入学を実施した国立大学の学部数等は、昼間部74学部(22%)、夜間部13学部(76%)で（文部省大学課調）、前年度に比し微増であった。

これに関する研究は今回も10大学以上にあった。

(1) 学内成績

54年度入学者について専門課程の成績を調査できる時点に至ったためか、この関係の調査は

9件みられた。主な結果は次のとおり。①推薦入学者群は一般入学者群より、取得単位数・成績において優るか同程度であり、より勤勉で留年はほとんどない（弘前大学、山形大学、福島大学、筑波大学、和歌山大学）。②推薦入学者の選考には、1次得点、高校の評定平均値の平均、面接及び小論文の得点を総合して使っているが、56年度にこれらの配点比率を変更した結果、学内成績との相関が高くなり改善効果があったと言えるのではないか（九州工業大学）。

(2) 意見・意識調査

北見工業大学では、教授会構成員を対象とする質問紙調査を行った結果、入学者の学力低下傾向の歯止めの一環として、また入学者全体に活力を与えるために、本方式を活用し、具体的な方法を更に検討すべきだとの傾向がみられた。筑波大学では、各学類・専門学群の推薦入学実施責任者を対象として、選考方法に関する質問紙調査を行い、改善資料とした。

福島大学経済学部夜間主コースでは、54年度以降の入学者の意識調査を行い、A商業高校推薦入学者群、B社会人推薦入学者群、C一般入学者群に分けて分析した結果、次のことが判った。①入学当初、対昼間主コース・コンプレックスが、B群は薄く、A群は中間、C群は強い分離状況を示したのに対し、②専門科目を本格的に履修する3・4年次では、C・A群のコンプレックスはかなり薄れた。③学内成績との関

連性では、コンプレックスが平均得点や単位取得状況に大きく影響してはいない。

3 特別入学方式

(1) 帰国子女・私費外国人留学生の入学

57年度に帰国子女を受け入れた国立大学は、6大学13昼間学部で、そのうち特別選考を行ったのは2大学6昼間学部であった（文部省大学課調）。まだ少数だが前年度より学部数において微増した。

研究面では、京都大学、大阪外国語大学が外国での資格取得者や帰国子女のための特別入試の検討を続け、筑波大学では帰国子女や私費外国人留学生のための第2学期推薦入学及び編入学の選抜状況を調査し、これに基づきこの方式の充実に向けての工夫・改善がなされた。

(2) 社会人入学

57年度に社会人を受け入れた国立大学は、53大学、111昼間学部、10夜間学部で、前年度よりかなり増加した。しかし特別の入学者選考を実施したところは皆無であった（文部省大学課調）。

研究面では、京都大学が学士入学のための特別入試を検討し、福島大学は経済学部夜間主コースの社会人推薦入学者群を含む意識調査を行った。